



Number 7

June, 2003

生きつづけるジョージ・エリオット

川本 静子

このたび思いがけなくも会長のバトンを引き継ぐことになりました。これまで五年間にわたって協会揺籃期のご苦勞を担われた海老根会長、内田副会長兼運営委員長、理事、事務局、運営委員会および編集委員会の方々に心から感謝申し上げます。おかげで協会の活動もようやく軌道にのってまいりました。さらなる着実な歩みに向かって微力ながら努めたいと考えております。会員の皆さんのご協力をお願い申し上げます。

ところで、最近、ローズマリー・アシュトンの『ジョージ・エリオット伝』(1996)とM・ハリス/J・ジョンストン共編の『ジョージ・エリオットの日記』(1998)を読みなおし、エリオット像が時の長い流れのなかで二転三転したことに改めて深い感慨を覚えました。最初にエリオット像を提示したのは、言うまでもなく、彼女の夫ジョン・クロスによる伝記(1885)です。クロスはおそらく妻のプライベートを慮ってでしょう、妻の手紙や日記から重厚な金言風な箇所のみを抜粋し、「巫女」としてのエリオット像を読者に押しつけた嫌いがありました。クロスによれば、日記や手紙からの抜粋という形で伝記を編んだのは、エリオットみずからに自己を語らせるためだということですが、抜粋が彼自身の選択である以上、やはりそれはクロスが構築したエリオット像に他なりません。エリオットの名声^{レピュテーション}が死後急速に下降の一路を辿ったのは、「rule of taste」のもたらす当然の成り行きとはいえ、クロスの伝記にも一端の責任があったと言えるかもしれません。

こうしたエリオット像を転換させたのが約80年後に出版されたG・S・ハイトのエリオット伝(1968)でした。9巻より成るモニュメンタルな『ジョージ・エリオット書簡集』(1954-5, 1978)を編纂したハイトが、手中に握る十二分の資料を駆使して世に送った伝記は、エリオット伝の決定版として当時高く評価されました。この伝記の基本的姿勢は、チャールズ・ブレイがエリオットを評した言葉——「彼女は独りで生きていくに適していなかった」——に立脚しています。つまり、男性以上に明晰な頭脳に恵まれながらも、多感で情にもろく、全面的に頼れる異性の存在を切望した女性としてエリオットを捉えているのです。これがクロスの伝記のアンティテーゼであることは言うまでもありません。こうしたエリオット像を提示するにあたって、ハイトは一貫して資料自体に語らせ、伝記作者としての介入を必要最小限度にとどめています。とはいえ、ハイトがいかに自己滅却型の方法をとろうと、資料の選択と強調の度合いに彼の基本的姿勢が反映していることは確かでしょう。その意味でこれもまたハイトの構築したエリオット像でありました。

ハイトによるエリオット像はその後長くエリオット研究界を支配しましたが、それを28年後に修正したのがローズマリー・アシュトンの伝記でしょう。アシュトンの強みは先にジョージ・ヘンリー・ルイス伝(1991)を著しており、かつハリスおよびジョンストン共編の『ジョージ・エリオットの日記』にその準備段階で目を通していることです。資料に関する万全の備えと相まって、アシュトンの卓越した学識はエリオットの知性と感性を彼女の生きた時代の文化的・知的ミリューのなかで捉えることに成功しました。その結果、「頼れる異性の存在を切望した女性」は、ヴィクトリア時代の価値の揺らぎの中で独自の生き方を貫いた「新しい女」に変貌したのです。

これらの三つのエリオット像は、書き手の個性ばかりではなく、作品と作家の距離について、女性に関する認識において、あるいはヴィクトリア朝文化一般の研究において、それぞれの伝記を生み出した時代のスタンスを反映するものでしょう。アシュトンのエリオット像とて不動のものではありません。エリオット像の次なる変貌は、読者一人一人の広義の「読み」の蓄積からもたらされるに違いないと考えた次第です。